

第四節 えらぶ語の研究

序言

◇ この小著は、国語を主に置きこれに対応する方言を採録したものであつて、その志すところは、父祖以来大和民族の一分派として共通国語の中に生活し來つたという同胞意識を一層明徴にし、且つ明滅の境にある旧き国語が、われらによつて今尚忠実に保存せられてゐることを宣揚し、併せて方言研究家に一資料を提供したいというに外ならないのである。

◇ 方言の採録については、大体左の諸点に目標を置いたつもりである。

一 方言中に存する国語の古語は努めてこれを逸しないつもりである。

二 現代語として広く使用せられ、且つ国語・方言両者の対照明瞭なるものは、これを省くことにした。

〔例〕雨。風。探る。高し。涙。半紙。落第。雇。
三 現代語として広く使用せられつつあるも、転訛著しく、方言の形体異なるものは、これを採録することにした。

〔例〕簡約。斟酌。状。正当。心服。大事。横柄。
四 方言は明治時代を区画となし、それ以前において使用して現在に及ぶもの、或は既に廢語・死語に属するものを採録したつもりである。特に漢語はその用意にとめた。

五 解釈は、必要に応じて、或は數義を別記し、或は一義のみを示したのもあるが、何れも方言の使用の如何を示す参考のためである。

六 解釈は殆んど大言海に拠つた。同辭書は語原の詮索について特色を有し、且つ著者大槻博士は斯界の權威者として洽く知られているからである。
文語体を用いたのは、冗漫に陥るを避けたいためである。

七 方言の使用例は、理解を容易ならしめるため、用例に供せられる語の外は国語の形に従った。

〔例〕「才宮詣りニ美シクシ。こて行ク」

「アノ人ノ事ハ一向あてナイ」

八 国語中同一の語で二体ある場合は方言の形に近いものを採った。

〔例〕 いもとうむほうむヲ示ス

うを下いをハいをヲ示ス

しのぶトしぬぶハしぬぶヲ示ス

◇

この小著は、方言資料とも称すべきものであつて、増補訂正を要すべき点の多々あることは自分もこれを認めている。斯かる未定稿にも等しきものを発表するというのは、これによつて幾分でも方言研究の熱を昂め、同志を多く得てその完璧を期せんとするためである。

「えらぶ語」とは

沖永良部は、鹿児島県大島郡に属し、奄美群島中の一島である。鹿児島を距ること三百十海里、與論島を挟んで近く沖繩本島に接している。現在、沖永良部島と称し

ているのが、中山博信録には、鳥奇奴永良部ウキヌエラフに作り、明人の書には野刺普の字を充ててある由である。而して土地の者は単に「いらぶ」と自ら呼んでいる。本書の「えらぶ」は即ち沖永良部島であり、「えらぶ方言」はこの島の方言の謂である。

島のその面積六方里余、現在（昭和九年）人口二万九千を数へ、和泊・知名の二村に分れている。地は極めて平坦であり、自ら農業が發達し、住民の九割以上はこれに従っている。

往昔の史実はこれを徴すべきものを持たないが、島の旧家に伝わる記録によると、琉球国が三山に分裂した時代（今を距る五百四十余年）北山王の二男、真松千代なるものが一島統治の主として来島の由を記してあるによつても、琉球国との政治的關係の密であつた事がわかる。爾来（あるいはそれ以前か）琉球王国の支配下にあつたわけであるが、慶長十四年（今を距る三百二十六年前）薩摩の琉球征伐の結果、大島・喜界・徳之島・與論の四島と共に薩摩藩の直轄に移つてしまつたのである。而して元禄四年代官役所が徳之島より分離し、和泊に置かれてより爾来、和泊は沖永良部・與論両島行政の中心と

なつたわけである。

それより薩摩置県、代官引上げに至る百八十四年の間、代官役所の役員として薩藩士の来るもの実に五百五十五人、また遠島人としてこの地に流謫せられた薩人の数も可成りの数に上ると思う。西郷南洲先生は実にその一人で足掛三年の間この島に滞留した。これら流人の中には可成り教養のある士もあつたようである。旧薩時代島の青少年にして学に志して鹿児島島の地に出掛けたものも可成りにある。

これ等の事情を綜合するに、「えらぶ語」とは、琉球を母として、薩摩を父として發達し來つたものであるといつてよい。

全島は三十六の大字に分れているが、各字毎に、その抑揚に、その表現の形式に多少の相違があり、南北両端においては別語の觀さへあるが、これを大きくわけると、和泊方言と東方方言（現在の知名村並に和泊村の一部を含む）の二つと見ることが出来る。その著しき相違は「カ行」の「キ」が、口蓋化して「チ」となると否と、「ザ行」の「ザ」「ズ」が拗音化して「ジャ」「ジュ」になると否である。例を示せば

	(国語)	(和泊方言)	(東方方言)
肝 <small>キミ</small>	ちむ	きむ	
息 <small>イキ</small>	いち	いき	
行く	行ちゅん	行きゅん	
引く	引ちゅん	行きゅん	
麦 <small>ムギ</small>	むじ	むぎ	
漕 <small>カガ</small>	漕じゅん	漕ぎゅん	
香 <small>カガ</small>	はぎ	はじや	
飾 <small>カサ</small>	かざい	かじやい	
去年 <small>コゾ</small>	ふず	ふじゆ	
尾 <small>ヲ</small>	ざー	じゅー	

「共通の転訛は「えらぶ語の音韻転訛」の項を参せられたい」

この中に採録したのは、和泊方言を主としたのであるが、「キ」の口蓋化「チ」は採らず「キ」に従つた。なお和泊は歴史的關係よりして久しく一島文化の中心で、外部との交渉も密であり、随つて語彙も他の部落よりも多かつたからして、この書の中に採録した方言が、一島全部の方言なりと即断することはできない。殊に薩摩方

言との関係においてはそうである。

えらぶ語の音韻

各地の方言に用いられる音韻の多種多様なるは云うまでもない。「えらぶ語」もこれと同様で、音節を表記するに留まる仮名文字を以って示すことは到底不可能であるが、本書は国語と方言の音韻の比較研究ではないのであるから、特別の記号を用いずに、仮名を以ってするのである。左表は、「えらぶの方言」の中に使用せられつつある音韻で、その発音の如何はローマ字綴りと対応して貰えば大方了解が出来るであらう。

	行段	か	が	さ	ざ	しゃ	じゃ	た	つ
	あ	か	が	さ	ざ	しゃ	じゃ	た	つ
	(a)	(ka)	(ga)	(sa)	(za)	(sha)	(ja)	(ta)	(tsa)
	い	き	ぎ	ずい	し	じ	じ	と	つ
	(i)	(ki)	(gi)	(zi)	(shi)	(ji)	(ji)	(ti)	(tsi)
	う	く	ぐ	ず	し	じ	じ	と	つ
	(u)	(ku)	(gu)	(zu)	(shu)	(ju)	(ju)	(tu)	(tsu)
	え	け	げ	ぜ	し	じ	じ	て	つ
	(e)	(ke)	(ge)	(ze)	(she)	(je)	(je)	(te)	(tse)
	お	こ	ご	ぞ	し	じ	じ	と	つ
	(o)	(ko)	(go)	(zo)	(sho)	(jo)	(jo)	(to)	(tso)

右を以て「えらぶ方言」の音韻の全部を悉くしたわけではない。ga・gi・gu・ge・goの如く発音する「か行」もあり、(iya・iyu・iyō)の如く発音する「や行」もあり、(uwa)の如く発音する「う」もあり、ローマ字を以て示す事の出来ないものもあるが、これらは何れも右表の中に近いものを代用せしめておく。ただ「わ行」の「う」は「ア行」の「う」と区別する必要を認めるから「づ」「ヴ」を以ってこれを示すことにする。

なお序に国語五十音図の発音について一言する。「えらぶ語」の方言使用に馴らされたものは、大体国語の発音は正確であるという自身を有している。そればかりでなく、五十音図の中に形のみを存し、明滅の境にある「わ行」の「ゐ」「を」は明確に「い」「お」と区別している。その発音のいかかわしきものには、「せ」を「しエ」に発音し、「は」が「ふあ」に近く発音せられる。なお「じ」と「ち」「ず」と「つ」の区別は曖昧である。

えらぶ語の音韻転訛

琉球語が「あ・い・う」三母韻の上に成立していることは夙に知られている事実であり、またこれが国語の原

だ	ち	ぢ	な	は	ふ	ば	ま	や	ら	わ	き	ぎ	に	ひ	ぴ	び	り	み	び
(da)	(cya)	(dja)	(na)	(ha)	(fu)	(ba)	(ma)	(ya)	(ra)	(wa)	(ki)	(gi)	(ni)	(hi)	(pi)	(bi)	(rya)	(mya)	(bya)
ど	ち	ぢ	ぬ	ふ	ぶ	ぶ	む	ゆ	る	ヴ	き	ぎ	に	ひ	ぴ	び	リ	ミ	ビ
(do)	(chu)	(dju)	(nu)	(hu)	(bu)	(pu)	(mu)	(yu)	(ru)	(wu)	(kyu)	(gyu)	(nyu)	(hyu)	(pyu)	(byu)	(ryu)	(myu)	(byu)
で	ち	ぢ	ね	へ	ふ	べ	め	れ	ゑ										
(de)	(che)	(dje)	(ne)	(he)	(he)	(pe)	(me)	(re)	(we)										
ど	ち	ぢ	の	ほ	ふ	ぼ	も	よ	ろ	を	き	ぎ	に	ひ	び	び	リ	ミ	ビ
(do)	(cho)	(djo)	(no)	(ho)	(ho)	(po)	(mo)	(yo)	(ro)	(wo)	(kyo)	(gyo)	(nyo)	(hyo)	(pyo)	(byo)	(ryo)	(myo)	(byo)

始状態を示すものであることも学者の説の相一致するところであるから、同様「あ・い・う」がその音韻の基礎をなしている。そこで「え」が「い」に、「お」が「う」に転ずることを始め、其の他の転訛は大方沖縄語と相一致する。

左にその転訛の著しきものを示して、方言解釈の資料に供する。

一 「え列」の音は「い列」の音にかわるものが多い。

えび (蝦)	いび (野)	けい (野)	きー
せち (節)	しち (敵)	てき (敵)	といき
ねじ (榎子)	にじ (敵)	へた (下手)	ひた
めし (飯)	みし (飯)	あれ (彼)	あり
ゑ (絵)	みー		

二 「お列」の音は「う列」の音にかわるものが多い。

おに (鬼)	うに (鯉)	こひ (鯉)	くひ
そば (側)	すば (側)	のみ (蟹・蚤)	ぬみ
とき (時)	とウキ	ほし (星)	ふし
もち (餅)	むち	よく (慾)	ゆく

ろん(論) ろん(叔母) をば(叔母) うば

三 「か行」の音は「は行」の音「かわる」とがある。

(国語) (方言) (国語) (方言)

かさ(笠) はさ(樹) き(毛) ひー

くがに(黄金) ぶがに(毛) け(毛) ひー

こし(腰) ふし(瓶・亀) かめ(瓶・亀) はみ

但し語の中または下に来る場合は転じない。

四 「あ列」に「え列」の続く場合には、語頭と同じ列の「えー」にかわることがある。

(国語) (方言) (国語) (方言)

あえる(零) えーる(欠) かけ(欠) けー

さへる(遮) せーる(延) はへる(延) へーる

なえる(萎) ねーる(負) まける(負) めーる

まへ(前) めー

五 「あ列」に「い列」の続く場合には、語頭と同じ列の「え」の長母音「えー」にかわることがある。

(国語) (方言) (国語) (方言)

あい(藍) えー(対) たい(対) てー

はひ(灰) へー(地震) ねー

六 「あ列」に「か」の続く場合は、語頭の長音とかわ

ることがある。

(国語) (方言) (国語) (方言)

あかる(離) あーる(別) わーる

なか(中) なー(量) はーる

七 短音が長音にかわることがある。

(国語) (方言) (国語) (方言)

て(手) てー(名) な(名) なー

おにば(鬼齒) うにば(見物) みーむん

八 「リ」は語の下に来る場合「い」にかわることがある。

(国語) (方言) (国語) (方言)

とり(鳥) とい(槍) やり(槍) やい

あかり(明) あかい(瓜) うり(瓜) うい

ゆり(百合) ゆい(針) はり(針) はい

右の外、同列間、同行間の転訛も可成りに多く、また音の省略、音の添加等も行われている。右に挙げたる変化が、錯綜しているために、国語との懸隔が著しく、殆んど別語の観あるものも数多くあるが、その纏れを入念にほぐして見ればあかの他人でなく、ただその装いの異なることによって別人の姿に見えていたことを発見するであらう。その二三の例を示せば

○はがに||かがみ(鏡)

「は」ハ「か」ノ転、「に」ハ「い」列の音通

○まーりちき||うまれつき(生付)

「まー」ハ「うま」ノ「う」ノ脱、「ま」ノ延音

「り」ハ「ら行」ノ音通、「ち」ハ「う列」ノ音通(「まーりちき」ノ「ま」ハ実際ハ「ウま」ノ如ク発音スルモノニシテ、全然ノ「う」ノ脱落トハ云ヒ難キモ、暫クコレヲ脱落ト見做シ置ク)

○べー||ばかり(コレノミばかり)

ばかり||びかい||びけ||べー

○めーらび||めわらべ(女童)

めわらべ||めわらび||めらび||めーらび

語彙 「あ——」「す」

【あ】ノ部

あいづかはし 愛敬ヅキタリ「愛就くトイフ動詞アリテ其未然形ノあいづかヲ活用セシメタル語ナルベ

シ」

○あいちく あいづかはしノ形容詞ヲ生ミタル動詞ナ

ルベシ、親シミ懐ク意(用キル動詞) 例「アノ子供ハ自分にあいちかぬ」

あえもの 「肖物」 アヤカリモノ

○あいむん 国語ノ意味トヤヤ異ナリテ珍重スベキ品物ヲ云フ

アカ 「閑伽」 差水ノ船ノ底ニ溜リタルモノ

○アカ 右ノ場合ニノミ「アカ」ト称ス

あかがね 「銅」

○あしかに 鉄ハ「くるかに」、黄金ハ「ぶがに」

あがく 「足掻」 手足ヲ動カシテ苛ツ

○あがく 右ノ意ヲ転用シテ、働クコトニ云フ、例「ヨクあがく女デアル」

あかす 「明」 (一)夜ヲ経過ス(二)秘シタルヲアラハス

○あーす 右夫々ノ意ニ用キル(二)ノ意義ヲ有スル名詞形「あーしむんがたい」(明し物語) ハ謎々ノ如キモノ「むぬあーし」ハ易者ノ意

あかとき 「暁」 明時ノ義、あかつきの本語

○あーとウき 熟語ニ

・あーとウきちつちゆ (暁月夜)

・あーとウきうい (暁起)

・あーとウきゆやみ (暁夜闇)

あから 「赤」 あからむノ語根

○あーら・はたら。赤色ノケバケバシキニ云フ。ナホ

「まっから」ハ真紅、「あーらひる」ハ真晝ノ意

あかり 「明」(一)光線 (二)燈火

○あかい。あーがい。右(一)ノ場合ハあーがイトモ云ヒ

「明るいとこころ」ノ意ニ用キル。

あかる 「離」 離レ去ル

○あーりる 右ノ意ニ同ジ、他動詞ハ「あーす」

例 「可愛シイ子供ニあーりる」

あきはつ 「厭果」 全クアク、アキレテシマフ

○あきはてる 右ノ意ニ全ジ、例「夫ノ仕打ニハあきは

はててシマツタ」

あぎ 「鵬」 魚ノ鯤

○あぎ 右ノ意ニ用キル

あくた 「塵芥」 ゴミ、ゴモク

○あくた ちり「塵」ノ語ハナシ、ごみはぐみ、あく

たハあくた、共ニ塵芥ノ意ニ併セ用キル

あぐむ 「倦」 爲^シ遂^トダケカネテ倦ム

○しーあぐん 爲^シ倦ムノ意ナルベシ、例「勉強ヲしー

あぐんスル」コレヲ形容詞ニ用キテ「あぐま

しヤ」トモ用キ、倦怠、難儀ノ意アリ、例「あぐ

ましヤノ仕事ハ人ニサセル」「あぐましヤシテ仕

事ヲセヌ」

あぐねる 「倦」 あぐむニ同ジ

○あぐねる 端坐ノ膝ヲ崩シテ坐ス、コレヲあぐねる

ト云フ、倦み居ナルベシ、あらぐゐ「呉床居」

ハあぐら又ハいたぐらト云フ

あくぞーもくぞ 人ノ瑕疵^{キズ}ヲアゲテサマザマニ言ヒ罵ル

ニ云フ卑語

○あくぞーむくぞ 右ノ意ニ同ジ

あくど 「踵」 カカド

○あーどウ 鹿兒島ニテハ「あとじい」「あどど」、「長

崎ニテモ「あど」の由、「歩く処」ノ義カ

あげまき 「総角」 古代少年男子ノ髪風

○あぐまき 大言海ニハ「髪ヲ結フヲあぐト云フ、結

げ巻く意ナルベシ」トアルモ古代少年男子ノ髪風

ナルヨリ推シテ「阿古卷」ノ転ノ様ニモ思ハル。

方言ノ「あぐまき」ト云フ髪ヲ三分シテ打交ヒニ

結ブコトナリ。

あこ 「阿古」 吾子^{アゴ}ヨリ移リタルモノ、童男・童女

○あぐ 友達ノ意ニ用キル・右ノ意ノ転ナルベシ、友

達ヲ云フ語ニどし(同志)アリ、而シテあぐハ多

ク童友ノ意ニ用キル

あさまし 興醒メタリ、アキレタリ

○あさまし 右ノ意ニ同ジ

あさり 「漁」 魚介ヲトル

○あさい 専ヲ介類ヲトルコト、又ハ介類ノ総称トシ

テ用キラル

あざなふ 「糾」 (交^{アザ}へ^ナ縋^フ) 交ヘアハス、縋フ

○あじる 交ヘる意ナリ、コノ語ハあヲ語幹トシテ、

あぜ、あずノ如ク活用セシモノニアラザルカ

あそび 「奏楽」 糸竹、管絃、ウタマヒ

○あすび ウタマヒノ意ニ用キル、源氏物語「月ノオ

モシロキニ、夜深クマデ、あそびヲゾシタマフナ

ル」ノ用例ニ適フ。

あたらし 「可惜」 惜シムベシ

○あたらしや 右ノ意ニテヒロク用キル、「惜し」ハ

「残り惜し」ト用キラル、位ナリ、

「あたらしき物」ノ場合ハ「あつたらむん」ト促音

化ス

あたり 「辺」 其ノトコロニ近キ程ノトコロ

○あたひ 右ノ意ノ外ニ、部落ヲモ云フ、

例「東あたひ」

アダシ 「阿檀」「阿苴」 南洋語ナルベシ、

沖繩語は「あだに」

○アダシ 「アダシ」ハ南洋語ニアラズ、純然タル国

語ナリ

永井龜彦先生曰「アダシハ立派ナル国語ニシテ

「仇根」ノ意ナリ、仇根トハ氣根徒ヲニ派生スル

ニヨリテ名付ケシナルベク、十島ニテハ「アダナギ」

ト称ス、即チ「仇根樹」ナリ、コレヲ外来語ノ様

ニ取扱ヒシハ、支那人等琉球ニ来リ、其ノ名ヲ訊

キ「アダシ」ト答ヘシヨリ、勝手ニ「阿檀」「阿苴」

等ノ字ヲ充テシヲ、外来語トアヤマリテ、其ノ逆

論入シタルモノナリ云々」

あたふた 「倉皇」 アワタダシク

○あただ 不意ニ、突然ノ意加ハル。例「あただニ思

出シテ旅立ラシタ

あつかふ 「扱」 (一)モアアツカフ、遣フ、用キル

(二)マカナフ、取りサバク、処理

○あちこち 鶏ヲ屠リ料理ヲナスニ「鶏ヲあつこち」ト云フハ右ノ(二)ノ意義ノ転用ナルベシ、ナホ手ニヲハヌ者ヲ「あつこちぬ者」ト云フハ(一)ノ転用ナルベシ。

あつらふ 「誂」 注文シテ造ラシム

○あつイれる 右ノ意ヲ単ニ頼ムコトニ転用ス、例「人ノあつれ物」ハ人ヨリ届ケ方ノ依頼ヲ受ケタル物ノ意

あて 「当」 目当^{めあて}トスルトコロ

○あてイ 右ノ意ニテ用キル、ナホコレヲ転用シテ「存知」ノ意ニテヒロクニ云フ。而シテ「知る」「知らず」ノ語は殆ンド用キラズ、例「あてイアル人トノミ話ス」「アノ人ハ一向あてイ無イ」

あはし 「薄」 薄シ、アツサリトシタリ

○あはさ 主ニ汁物ナドノ塩氣ノ足ラザルヲ云フ
あはす 「合」 タタカハス

○おーす 右ノ意ニ用キラル、例「牛ヲおーす」

あふへい 「押柄」 高ブリ構ヘテ居ルコト

○うーへ 右ノ意ニテ用キラル

あへしらふ 「接待」 取扱ヒ、モテナシ

○あいしれ 右ノ意ニテ名詞トシテ用キラル、例「ナカナカあいしれノヨイ女デアル」

あんざ 「安坐」 アグラヲカキテヨルコト

○あんざ 右に同じ

あんど 「安堵」 安意、安心

○あんどウ 心ノ安マルコトニハ「安心」ヲ用キ、飽食ノ場合ニ「モウあんどウシタ」ノ如ク云フ、鹿兒島ハ「あんどシタ」

あも 「阿母」 母ニ同ジ

○あま 父ヲあちやト称スルニ対スル称

あやかし 海上ノ妖怪

○あやかし 妖怪ノ人ヲ迷ハスコトヲ云フ動詞ナリ、例「物ニあやかされヌ様ニ氣ツケヨ」

あやかる 「肖」 他ニ感ジテ同ジ姿トナル

○あやかる 右ト同ジ意 例「東郷大将ニあやかる」

あゆ 「零」 零^{コボ}レオツ、落ツ

○えーる。えーハあえノ約、あえるニ同ジ、例「乳

ガえーる」「蜜柑ガえーる」

あんのぢョウ 「安定」 思案シタトホリ

○あぬじョー 右ノ意ニ同ジ

あよぐ 「揺」 あゆぐに同ジ、揺グ、動ク

○あよさ 形容詞ニ用キル。魚、鳥ナドノ人ヲ怖レテ容易ニ近ツカヌ場合「あよさノ魚ダ」ノ如ク云フ
草木ノ揺グコトニハ云ハズ、

あら 「枯」 穀ヲ搗キテ殻ノ脱セザルモノ

○あら 右ニ同ジ

あらため 「改」 糺^{タダ}スコト、シラベ

○あらたみ 右ニ同ジ、次第ニ廢語トナル

あらもと 「糲」 搗^ツキ精^{シラ}ゲタル時碎ケタル米

○あらむとウ 右トハ相反シ、碎ケザル粒米ヲ云フ

あらひよね 「洗米」 かしよね、又ハせんまい、精米

ヲ水ニテ清ク洗ヒタルモノ、多ク神ニ供フルニイフ。

○あれぐみ 「洗ひ米」ノ義、右ニ同ジ

あらしこ 「荒子」 荒仕子ニテ荒仕事スル者ノ義、人

夫、夫卒

○あらしかむん あらしこ者ニ当ル、腕力ノアル壮男

の意

ありなし 「有無」 あるトなきト

○あいない ありのままノ意ニ用キル。例「あいない話シテ聞カセヨ」

あわをふく 人ノ甚シク苦シム時ノサマ

○おーふく 右ニ同ジ、著聞集「タダ締メニ締メマサリケレバ、既ニ泡をふきて死ナムトシケリ」ノ用
例ニ同ジ。あへぐ、あはく「喘」用例ハあわをふくヨリ甚ダ古キモ同ジクあわをふくノ約ニアラザル

カ。枕草子「老イタル者ノ腹高ク、あえぎ歩ク」
ナド方言ノおーふくニ同ジ

あをしば 「青柴」 葉ノツキタル柴

○おーしば 右ニ同ジ

「い」ノ部

い 「臆」 きも

○いー 臆汁ヲ云フ。例「いーヲ吐ク」

いかへる いハ発語、帰ルトイフニ同ジ

○いける けハカノ約、到着ノ意ニテ用キル。例「モ

ウ家ニいけたデアラウ」

いか 「如何」 イカニ、イカバカリ

○いきや 国語ニテハ語根ノ姿ニテ残り、其ノ俣ノ用
例ハ乏シキモ、方言ニテハ、いかにノ場合いきや
ト用ルルコト多シ。例「親ニ死ナレ、いきヤシテ
暮スカ」「コノ病、いきヤスレバヨクナルカ」
いきりやう 「生霊」 生キタル人ノ怨霊ノ他ニトリツ
キテ惱マスコト

○いきろー 右ニ同ジ
いきむ 「息急」、息ヲ腹ノ中ニ張ル

○いきユむ 右ト同ジ意、産氣ツキタル場合ナドニ云
フ

いくしほ 「幾入」 幾度染

○いくしゅ 藍染ノ場合ナドニ云フ。例「モウコレデ
いくしゅ染メタカ」 一度染ハ「ちゅしゅ」二度
染ハ「たしゅ」

いくか 「幾日」 ナニホドノ日数

○いツか 右ニ同ジ、枕草子「いくかバカリ籠ラセ給
フベキナド問フ」ノ用例ニ同ジ

いける 「埋」埋ムル意

○いきる 右ノ意ニ同ジ。例「死人ヲいきる」「火ヲ

いきる」

いけ 「池」
○いーき 水ヲ湛ヘ置クトコロニハ「たみき」(溜池)
「ふむい」ト言ヒ、単ニいけトハ称セズ、「いーき」
ハ死人ヲ埋ムルタメニ堀リシ穴ナリ。例「いーき
ヲ堀ル」
いご 「以後」 コレヨリ後

○いぐ 打消ノ場合、意ヲ強ムル場合「モウ決シテ」
ノ意ニ用ル。例「いぐソシナ事ハシナイ」

いざり 「漁」 魚ヲ捕フルコト

○いざい 夜ニ漁火ヲ点ジテ漁スル場合ニノミニ云フ、
又漁火ヲ云フ

いさかひ 「諍」 言ヒアラソヒ

○いさけー 意右ニ同ジ

いしやう 「衣裳」 今ハ一般ニ着物ト云フ、「仙台ニ
テハ今モスベテ衣裳ト云フ」

○いしやう 着物ノ謂ニヒロク用キラル、外ニ着物ノ
語、「きん」(きん) 廢語ニ近シ「きばら」(着物
ノ義カ) 町寧ナル語ニハアラズ

いしびや 「石火矢」 古製ノ大砲

○いしびや 今ハ廢語ナリ。例「唐ト日本トいしびや
ノ戦ガアツタ」

いたづらに 「徒」 空シク。無益ニ

○いたじらに 右ニ同ジ、熟語トナリテ

「いちやんだむん」 徒物

「いちやんだじん」 徒銭

いたく (副詞) 甚クノ連用形。甚シク、ヒドク

○いちヤーく、右ト同ジク用キラル。例「いちヤーク
病ム」「いちヤークアタル」コレヲ転用シテ「マ
ア本当ニ」ノ意ニ用ルルコトアリ。例「いちヤー
ク年ガ寄ツタネ」古今集「数フレバ、トマラヌ
モノヲトシトイヒテ今年ハいたく老イゾシニケ
ル」ノいたくノ如キハコノ意ニ解シテツ適切に覺
ユル

いちび 「苺」 「いちび」の中略ナルベシ

○いちユび 国語ニテハ「び」ガ略セラレ、方言ニテ
ハ「」略セラル。「いちび」ノ中略ナルコト
疑ナシ

いちび 「二期」 一生

○いちび 沖繩ヨリ伝誦歌謡ニ見ルノミ。例「いちび

ママトウムテ思ラハン」(一生自由ニト思ツテモ)

いっち 「逸」 逸ノ急呼、最モスグレタル意

○いっち 右ニ同ジ、例「自分ハ才前がいっち好き」

いちげい 「一芸」

○いちげー 俚言「一芸ハ身又助キ」

いぢ 「意地」 心根、我意ヲ張りトホス心

○いぢ 右ニ同ジ、転ジテ意氣、元氣の意ニ用ル。
例「いぢガナイ」(意氣ガナイ)

いぢ者 (元氣者又ハ殊勝ナ者)

いっちやうら 「一張羅」一枚キリノ晴着

○いっちやびら 右ニ同ジ

いづれ 「何」 不定ノ事物ニ用キル代名詞

○うどうる 右ニ同ジ うはい、どウハづノ転。例「コ
レトアレトうどうるを取ルカ」

いッけん 「一件」 俗ニ事実ヲ言ハズ「あの事」ナド
の意ニ用ル。

○いッきん 右ノ意ニ同ジ

いッすんのむしにごぶのたましひ「一寸の虫に五分の魂」
○いッすんぼーぬぐぶだましひ 「一寸坊の五分魂」

いで 誘ヒ立ツル時又ハ思ヒ立ツ時ニイフ声

○でイ 右二同ジ 例「でイ行カウ」
いとわく 「糸杵」 糸ヲ繰り絡ク杵

○わーく いとヲ略シテ言フ

いとなし 「暇」 (一)イソガハシ (二)少シバカリ

○いちゆなき (一)の意 例「今日ハいちゆなき」

(二)ノ意 例「いちやき」トイフ

いとま 「暇」 (一)休暇ヲ申請スルコト (二)辞職

○いちユマ 右夫々ノ意ニテ用キル

いはひごと 「祝事」 祝フベキ事

○ゆえぐとウ 右二全ジ

いばり ゆばリノ転 小使二同ジ

○しばい 尿ヲアラハス語ニハ「し」と「しし」等アリ。

大言海「し」(水ノ音ノ約)トアリ、又「染む」^{シズク}「雫」

「滴」^{シタタリ}等ニヨリ押シテ「しほり」ト言ヒ得ル様

ニ思フ

いばりぶくろ 「尿袋」 膀胱二同ジ

○しばいぶくる 右二同ジ

いびぎ 「軒」 息響く^{イキヒキ}の約、いびくコト

○ねいき 寢息^{ネイキ}ノ約ナルベシ。コレヨリ推シテ、いび

きハ寐息^{イイキ}或ハ寐息響^{イイキヒキ}ノ約トモ思ハルルガ如何ニ。

ナホいびきヲかくハはく(吐)ふく(吹)ノ意ナ
ルガ如シ

いふう 「異風」 尋常ニ異ナル風

○いふー 右二全ジ

いめ 「夢」 ゆめの古語

○いみ 右二全ジ

いんか 「印可」 芸術ノ免許

○いんか 免許ノ意 今ハ死語ナリ

いよ 「愈」 いよいよニ全ジ、マスマス

○ゆう 「いゆ」ノ約 例「近頃ハゆう良クナッタ」

いらす 「貸」 貸ス、借^{イラ}ふノ反

○いヨース 右二全ジ 「借る」ハ「いユース」

いらか 「覺」 屋ノ脊、家ノ上棟

○いーき 右二全ジ 例「屋ノいーきが剥ガレタ」

いらへ 「答」 コタへ

○いエ 右二全ジ 例「呼ンデモ、いエモセヌ」又

「いエふて」ト言フコトアリ、「いらへこたえ」

ノ意ナルベシ、「いエ」ヲ延ベテ「いエー」ト言

フ時ハ「伝言」ノ意トナリ「えーヲ頼ム」ノ如ク

用キル。コレハ「先方ノ返事ヲ頼ム」コトナリ、

今「えーヲスル」ト言ヒ、「えー」ヲ直チニ「伝言」

トスルハ非ナリ

いりめ 「入目」 費用

○いりみ 右二全ジ

いる 「炒」 土鍋ナドニテ炒リ焦^コガス

○いーく 右二全ジ 例「豆ヲいーく」「いりくむち」

(炒粉餅)

いれふだ 「入札」

○いりふだ 今ハ廢語トナル

いろこ 「頭垢」 ふけ全ジ

○いーき 右二全ジ うろこ(鱗)モ全ジクいーきナ

リ

いを 「魚」

○いユー 右二全ジ

「う」ノ部

うかりと 「浮」 ウカト。ウカウカト

○うかいと 右二全ジ

うがつ 「穿」 堀ル。孔ヲ明ク

○ぶがす 右二全ジ。自動詞「うぐ」ハ「ぶぎる」

ナホいびきヲかくハはく(吐)ふく(吹)ノ意ナ
ルガ如シ

いふう 「異風」 尋常ニ異ナル風

○いふー 右二全ジ

いめ 「夢」 ゆめの古語

○いみ 右二全ジ

いんか 「印可」 芸術ノ免許

○いんか 免許ノ意 今ハ死語ナリ

いよ 「愈」 いよいよニ全ジ、マスマス

○ゆう 「いゆ」ノ約 例「近頃ハゆう良クナッタ」

いらす 「貸」 貸ス、借^{イラ}ふノ反

○いヨース 右二全ジ 「借る」ハ「いユース」

いらか 「覺」 屋ノ脊、家ノ上棟

○いーき 右二全ジ 例「屋ノいーきが剥ガレタ」

いらへ 「答」 コタへ

○いエ 右二全ジ 例「呼ンデモ、いエモセヌ」又

「いエふて」ト言フコトアリ、「いらへこたえ」

ノ意ナルベシ、「いエ」ヲ延ベテ「いエー」ト言

フ時ハ「伝言」ノ意トナリ「えーヲ頼ム」ノ如ク

用キル。コレハ「先方ノ返事ヲ頼ム」コトナリ、

うこん 「鬱金」 草ノ名

○うきぬ 右二全ジ

ウサン 「胡乱」 疑ヒ怪シムベキコト

○ウサン 右二全ジ

うしほ 「潮」 海塩ノ異ニテ、食塩ニ対シテ云エル語

トイフ

○うしユ 右ノ意ノ如ク、海水ヲ「うしユ」ト云ヒ、

食塩ノ場合ハ「ましユ」(真塩)ト呼ビテ区別ヲ

ナス。うしほに(潮煮)ハ「うしユに」ノ語ト共

ニ事実モ存ス

うぎう・むぎう 「有象無象」 雑多ナル人物、悔リテ云

フ意アリ、約シテ「うぞむぞ」

○うしヨむしヨ 意右二全ジ。「うぞむぞ」ノ訛ト見

ルガヨシ

うし・の・ち 「牛乳」

○うし・ぬ・ち 「ギューニユ」ハ云ハズ

うたがはし イブカシ、不審ナリ

○うかごーしゃ 不安ニ思フ意、「いかゞはしい」

ノ訛カトモ思ハル

うちあふ 「打合」 合フ。カナヒ揃フ

○うちヨる 右ニ全ジ 例「学問モ身体モうちヨて良イ」

うちいづ 「打出」 言ヒ出ス、声ニ出ス

○うちぢやす 打出すノ形、右ニ全ジ 例「コノ事ヲ

うちぢやしたノハ彼デアル」

うつむく 「俯向」 下ニ向クコト

○うついんく 右ニ全ジ。他動詞「うついんきる」ハ

鍋・釜・茶碗等ノ器物ヲ俯向ニ置ク場合ニイフ。

例「茶碗ヲ棚ニうついんきる」

うなゐ 幼キ童男女

○うなゐ 女兄弟即ち姉妹ヲ云フ。男兄弟ノ「ゐー」

(兄)ニ対スル言葉。兄弟姉妹ヲ総括シテハ「う

なゐ・ゐー」

うなめ 「牝」 牝牛^{メウシ}。今モ、伊豆ノ東岸ニテハうなめ

ト云フ

○うなに うなにうし 牝牛ヲ「ふつてうし」(こと

ひうし)ト云フニ対スル語ニテみうし(牝牛)ノ

語ト共ニ用ヒル

うはなり・ねたみ 「次妻嫉」 (-)嫡妻が次妻ヲ嫉ムコ

ト (ニ)ネタムコト

○うアーない ネタムコトノミニ用キル

うはおき 「上置」 汁物ノ上ニ載スルモノ

○うアーうき 右ニ全ジ。ナホ「うは」ノ熟語左ノ如

ク意何レモ国語ニ全ジ

・うアーがき(上書) ・うアーちら(上面)

・うアーび(上辺) ・うアーに(上荷)

うひ 「初」 ハジメテナルコト

○うゐ コノ語ヲ接頭語トシテ

・うゐたび(初旅) ・うゐぐワ(初子)

・うゐなれ(初習)

うへさま 「上様」 (-)貴キアタリ (ニ)主上ヲ申シ奉ル

○うゐさま 右夫々ノ意ニ用キル

うまれ・かはる 「生変」

○うマリー・げーる ヨリ善キ性質ニナル場合ニイフ

例「彼ノ子ハうマリーげーて良クナツタ」

うま・の・す 「馬尾」 馬ノ尾ノ毛

○うマリー・ぬ・ざー 方言ニテハ、尾ト尾毛トノ別判

然セズ。大言海「す」ノ解ニ「馬尾」(水囊ノ簀

ニ用キルヨリ云フカ、馬ノ毛ヲ種々ノ細工ニ用キ

ル時ノ称トアルモ、総ベテ鳥獸ノ尻尾ヲ「ずー」

ト称ス。例「牛ノずー」「馬ノずー」ノ如シ。(国

語「そ」(麻)麻ノ皮ヲ割キテ、糸ノ如ク作レル

モノ)ト関係アル語ニテハナキヤ

うまご 「孫」

○うママーが うまが 何レモ孫ヲ云フ

うまずめ 「不生妻」 子ヲ生マヌ女ノ称

○うママーじり 右ニ全ジ 石女

うみばた 「海辺」 海ノホトリ

○うにばた うみべハ云ハズ

うむす 「蒸」 むすニ全ジ

○うむす むすトハ云ハズ、国語ニハ自動形ハナキ様

ナルモ、方言ニハ「うむりる」アリ

うむ 「績」 芋ヲ細カクサキテ長ク合セテ縊ル

○うむ 右ニ全ジ

うむ 「熟」 果物ドノ熟スルコト

○うむ 右ニ全ジ、熟シ切ツタルヲ「うみきりる」

うも 「芋」 いもの古言

○うむ 甘薯ヲ云フ、甘薯ニハ「琉球いも」「薩摩いも」

ナドトハ云ハズ

うらぶる 「心触るノ義」 思ヒ侘ブ 憂へ萎ル

○うらぶ うら(心)ヲ語幹トスル活用ト見ルガヨカ

ラムカ。憂ヘヲ他ニ訴フル意ニ用キル。例「金子

ガナイトイツテうらぶ」

うらかた 「卜兆」 大占、^{ウラナヒ}亀トニ頭ラレタル象

○うらかた 占ナフコトヲ云フ。例「うらかたヲサセ

テ見ル」

うらはら 「裏腹」 アベコベ

○うらはら 右ニ全ジ

うらみ・つらみ 怨メシキコト

○うらみ・こーみ 右ニ全ジ

うらめし 「怨恨」

○うらみしや 意右ニ全ジ

うらやまし 「妬」 ネタマシ

○うオーれましや 右ニ全ジ

うら 「己」 自称ノ代名詞

○うら 「汝」ノ意ニ用キル。国語ニテモ自称「おの

れ」ハ対称トナルコトアルニヨリ、コノ語コレニ

テ推スベシ

うるひ 「潤」ウルホフコト

○うり 雨ノ降りテ地ノウルホフコトニノミイフ。「雨

のうるひ」ニ全ジ

うるふ・づき 「閏月」 うるふニ全ジ
○ゆん・づき 沖繩「ゆんぢき」大島本島「ゆりづき」
鹿児島「よりづき」語系皆全ジ、「寄月」ノ義ナ
ルベシ、即チ正シキ月ニ寄ルノ意ヲ以テ斯ク云フ
ナラム

「え」ノ部

えつり 「枝吊ノ義」茅葺又ハ葦葺ノ屋根ニ、棟ノ
上ニ並ベテ茅葺ノ下地トシタル竹

○ゐーつイ 右ニ全ジ

えび 「蝦」

○いび いびハ伊勢えびヲ言ヒ、体小ナル海河ノ蝦ニ
ハ「たなが」ト云フ、「手長えび」ノ略ナルベシ

えんせう 「焰硝」 火薬

○ゐんしゅー 右ニ全ジ、次第ニ廢語トナル

えん 「艶」 ツヤメキタルコト、イロメキタルコト、
ウツクシキコト

○ゐぬ 其ノ義「イロメク」「ウツクシ」ニ相近シ。

人ノ容姿ノ艶ニ愛嬌アル、又ハ着物ノ品ヨキニ云

フ。例「アノ女ハみぬガアル」「コノ急須ハみぬ
ガアル」枕草子「人ノモテキタルヲ、青キウスヤ
ウヲ、えんナル硯ノ蓋ニ敷キテ」ノ用例ナドニ適
フ

えらぶ・うなぎ 「永良部鰻」

大言海「大隅ノ大島郡ノ永良部ノ辺海ニ産ス（中
畧）又皮ヲ蛇皮線ノ胴ニ張り、其外種々ノ用ヲナ
ス」

○いらぶ・うなぎ 沖永良部島ノ辺海ニ産セザルニハ
アラネドモ、捕獲スルハ稀ナリ、大島郡中其ノ捕
獲ノ多キハ十島村中ニアル宝島・小宝島及熊毛郡
中ノロ之永良部島ニシテ、えらぶハ口ノ永良部島
ニアラザルカ。

蛇皮線ノ胴ハ、永良部鰻ノ皮ニテハ張ラズ、支那
ヨリ輸入スル蛇ノ皮ヲ用キルナリ、又皮ヲ「種々
ノ用トスル」ヲ聞カズ。沖繩ニテハ、皮ノマヽニ
乾燥セシメテコレヲ販グ、強精ノ薬用ニ用キル由
ナリ

える 「得」 うノ口語、我が物トス、所有トス

○ゐる 方言ゐるハ貰フノ意強シ、例「コノ本ハ自分

がゐる」

おそはる 「魘」 夢中ニ鬼ニ襲ハル

○うさる 右ニ全ジ 例「物ニうさる」

源氏物語「イトアヤシウ物ニおそはれタル人ノナ
ヤマシゲナルヲ」ノ用例ニ適フ

おどろし 「驚」関西ニテハおそろしヲおどろしトイフ

○うとうるしヤ 鹿児島ハ「おとろし」ナリ

おちこぼれ 「落零」 稲ノ落穂、カキコボレ

○うちくぶり 右ニ全ジ

おとしだね 「落胤」貴人ノ嫡妻ナラヌ女ニ生セタル子

○うとユしだに 右ニ全ジ

おどがひ 「頤」 下顎

○うとウげ 右ニ全ジ

おと 「弟」「乙」(一)男又ハ女ノ兄姉ニ対シテ後ニ生

レタルモノ (二)年若キコト

○うとウ 右夫々ノ意ニ用キル

いもうと(妹)に当ル語ハナシ

おひ 「負」高価ナル物ト低価ナル物ト交換スルトキ

低価ナル方ヨリ不足ヲ補フコトヲ云フ

「おひヲ打ツ」

○うる 意義、用法共ニ右ニ全ジ

「お」ノ部

おお 「唯」 謹ミテ応フル声

○おー 目上ニ対スル応ヘニシテ、全輩又ハ目下ニハ

「んイー」ト言フ

おき 「熾」 炭火ノ赤クオコリタルモノ

○うき 右ニ全ジ

おくり 「送」 葬送

○うくい 名詞トシテハ、葬送又ハ家祭ノ後霊ヲ墓ニ

送ルニノミ用キル

おさへ 「壓」 オスニ用キルモノ

○うさい 右ニ全ジ 例「うさいヲカケル」

おしきる 「押切」

○うしきる 紐ノ類ヲ切ルニハ「きる」ヨリモ「うし

きる」ヲ多ク用キル

おしひしぐ 「壓拉」 ヒシグ オサエツク

○うしひしぐ オシ潰ス意ニノミ用キル、「おさへつ

く」ハ「うしつきる」

おび 「帯」

○うび 和服ノ場合ニ用キル帯ノ外、桶類ノ「タガ柁」モ同様「うび」ナリ

「帯」ヲ言フ語ニ「きーび」「さじ」アリ、「きーび」ハ衣帯キヌオビノ義ナルベシ、今ハ廢語ニ近シ、「さじ」ハ沖繩モ同様ニ言フモ語義考ヘラレズ

おふ 「負」 脊ニ載ス

○うーす 使役ノ形、おはすノ訛、牛馬ニ荷ヲツクル時ニノミ用キル、例「牛ニ米俵ヲうーす」

おふ 「生」 成り出ヅ、延ブ

○うゐ・ぢる 生ひ出づノ訛、コノ形ニテノミ用キル成長スルノ意

おふどの 「大殿」 禁中ノ寢殿

○ふーどウ・づくい。ふーどウヤ 家屋ノ建築ノ広壮ナルヲ云フ。大殿ノ如キ立派ナル意味ヨリ来レルナルベシ

おほいき 「大息」 タメイキ

○ふーいき 右ニ全ジ

おほごと 「大事」 非常ナル出来事

○うーぐどウ 大事ニハアラズシテ「オホゴト多事」即チ沢山

ノ意、鹿児島ノ「うーごツ」モ全ジ 「大事」ニハ

「デーじ」ト云フ、鹿児島ハ「デーじ」ヲツメテ「デーツ」おぼえ 「覚」 忘レヌコト、記憶

○うひ 右ニ全ジ 例「ソシナ事ハうびハナイ」

おぼつかなし 「無覚束」 分明トセズ

○うびつかなしヤ 右ニ全ジ 例「金ヲ借リタカ否カうびつかなしヤアル」

おぼるげに 「臆」 不分明ニ、サダカナラズ

○うぶる・とウぶる おぼるげにノ形ノ語ハナシ、意右ニ全ジ 例「昔ノコトハうぶるとウぶるシカ知ラヌ」

おんぎ 「恩義」 恩ヲ受ケテ報ユベキ義アルコト

○うんぎ うん(恩) ト共ニ用キラレル

おもかげ 「面影」 物ノ姿ノアリノト我ガ目ニ映リテ見ユルコト

○うむかぎ 意右ニ全ジ 例「朝夕母ノウむかぎガ立ツ」 「面影の立つ」ノ用例ハ國語ニ見エザレドモ巧ミナル表現ナリト覚ユ

おもひご 「思子」 愛メテ思フ子

○みいーぐワ 右ニ全ジ、子供ヲ愛メテ思フアマリ、常

○うゐび ゆびトハ言ハズ「おほおよび」(大指)ハ「ふーうゐび」

二氣ニカヽルヲ「みいーちヤサ」(思ひ痛しノ義)

トイフハ國語ニナキ用語ナルベシ 例「みいー

ちヤサノ旅ニヤレヌ」

おもや 「母屋」 住居ニ用イル本ツ家

○もーや ふーどウヤト全ジク建築ノ称ニシテ、其レヨリ劣リタルヲ言フ

おもて 「表」 城、屋敷、家ナドノ前方

○うむてイ中流以上ノ者ハ大方、上下ニ棟ノ家ヲ有ス上ナルヲうむてイ又ハうむてイヤト称ス、即チ表座敷ノアル家ノ謂ナルベシ

おもて 「面」 カホ、ツラ、面体

○うむてイ 同ジ意ノ語ニ「ちら」(面)モアリ、「うむてイ」ハ尊ビ言フ語ナリ。自ラシテ「うむてイヤ洗ツテ来タ」ナドトハイハズ

おもがい 「面繫」 馬具ノ称

○うんげー、しーげー(尻繫シツカキ)はらげー(腹繫)ト共ニ用キラル

おやかた 「親方」 親分

○うやかた 主ニ商店ノ主人ヲ云フ

および 「指」 ゆびノ古言